



1. 明日の都市交通となるか
2. わが国の人口は 103 703 552 人
3. 福祉国家はバラ色の未来を示すのか

1. 12月18日のA紙社会面に、交通関係の記事が2つならんでいる。1つは、東京湾横断道路計画であり、もう一つは、アメリカで行なわれた、新しい都市内交通機関としてのダッシュベアの実験である。この2つの記事の間には何のつながりもないが、偶然か、2つがならべられたことに、交通機関としての自動車の将来の姿を予見させる何かがあるように思えた。

2100億円もの建設費が予定される東京湾横断道路が、小回りのきく中・遠距離輸送機関としての自動車、産業物資移動のかなりの部分を肩代りしつつある自動車を対象としていることは、いうまでもない。一方のダッシュベアは、たしかに鉱石搬出手段として開発されたものと記憶するが、すぐれた自動制御機構をもつ無人電車として、乗客輸送への応用が早くから検討されていた。今回の実験は、その実用化への第一歩であろう。

今日の過密化した都市内では、自動車がもはやパーソナルカーとしての役割を果し得ないのは誰もが知るところである。都市内に生き残るのが、公共的なバス、タクシーなどなのか、ダッシュベアのような全く新しい輸送手段であるのか、予測はむずかしいが、パーソナルカーが都心部から締め出され、市街地入口までのみの輸送機関となる時期は、すぐそこにきている。 [S]

2. 昭和45年10月1日に実施された第11回国勢調査に基づく「人口概数」の集計結果によると、わが国の総人口は沖縄を含めると1億464万9017人で、初めて1億人を突破した。人口増加率は前回(昭和40年調査)にくらべ5.5%であったが、都道府県別では埼玉が28.2%増でトップ、次に千葉、神奈川と続いてドーナツ現象が進んだことがわかる。人口が減少した県はトップの鹿児島で6.7%減、ほかに19県が続き、大都市への人口集中が依然として続いていることがわかる。この大都市への人口集中とドーナツ現象のため、地価もドーナツ化を示し、東京では都心から1時間圏はすでに地価が頭打ちとなり、1時間半圏が急上昇している。これは、1時間圏が住宅地として高くなりすぎたため一般の購買力では手がとどかず、都市の外へ住宅地が大きく広がっているからである。このため通勤は、まだ戦後をぬけることができず、満員電車の中から途中広い空地や農地を見ながら、なんとなく割り切れない気持ちで毎日通勤することとなっている。国鉄、私鉄の相つぐ輸送強化も、通勤者の体力も限界に近い。狭い国土の中で、過密、過疎がある不合理を是正するよう大胆な国土計画、都市改造の提言が土木技術者の中から望まれているのではなからうか。 [C]

3. 昨年の暮、イギリスをゆるがせた電力ストは8日間も続き、非常事態宣言が発せられる騒ぎとなった。このストは、現代の文明国家において電力の供給が1週間もストップした場合、いかなることに相成るかを如実に示してくれた点で、まことに教訓的であったが、それ以上に考えさせられたのは、かつて七つの海に君臨した大英帝国が、このような非常識きわまるストライキを1週間以上もやらせるような、たがのゆるんだ国に転落してしまった事情である。

イギリスの没落は1905年、保守党が自由・労働両党に政権を明け渡し、増大する税金を養老年金に振り向け始めたときに端を発するといわれている。「揺り籠から墓場まで」のスローガンのもと、福祉国家のぬるま湯につかっている間にイギリス人の伝統的性格であった進取の気性と不撓不屈の精神は、いつしか消え失せ、技術の進歩と経済成長の停滞が始まった。

そして、ただ一つだけ強大になったのは、慢性的にストを繰り返す、雇用、賃金はおろか新しい機械の導入の可否まで決定するといわれる労働組合の力である。

社会福祉、公共事業いずれに重点をおくかは常に論議的になるが、福祉国実を旨ざすことが、そのままバラ色の未来を約束するものでないことはたしかである。 [J]